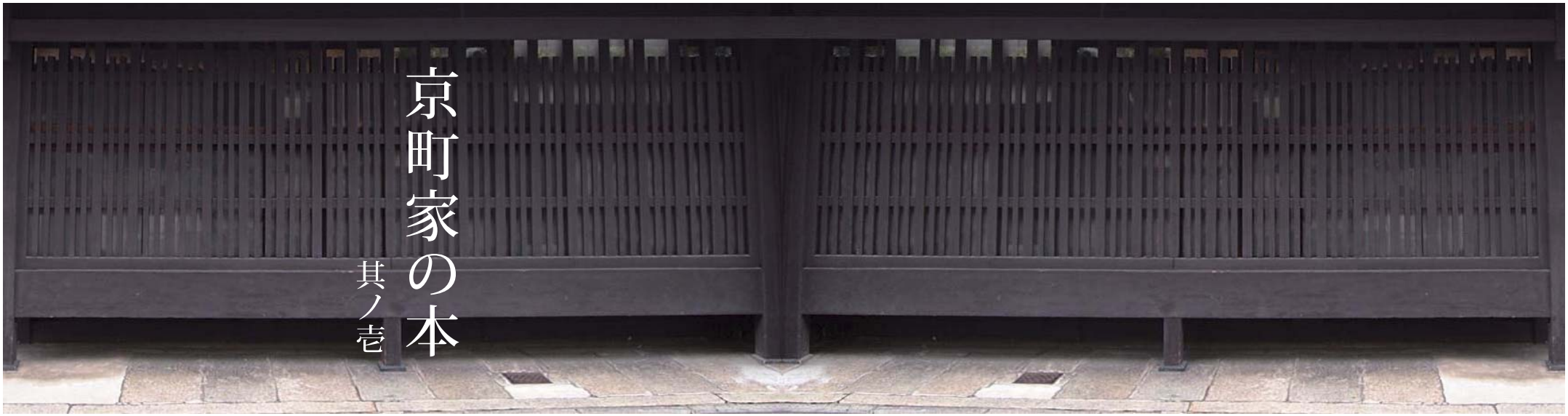
Kyomachiya book vol.1



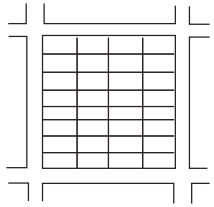
京町家の本

其ノ壱

株式会社八清

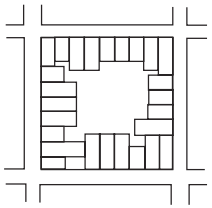
平安京創建から千二百年
碁盤の目の上で町並みを成し、
都の礎となってきた町家。
歴史の舞台となり続けた京の都を
脈々と守り進化させてきたのは、
他ならない都に暮らした人々なのである。
都人の住み処である「町家」と
呼ばれる建物は、現在京都市内に
四万七千戸存在している。
伝統家屋がこれほど存在している
都市は他にあるだろうか。
いや、他には無いだろう。
なぜ今、
これほど町家が注目されるのか？
その歴史の積み重ねや先人が築いた
智恵に触れることにより、
人々を惹きつけてやまない
町家の奥深さを感じてほしい。

＜両側町の誕生＞



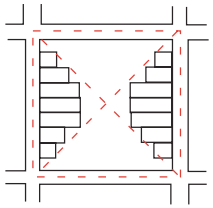
四行八門の区画割

↓



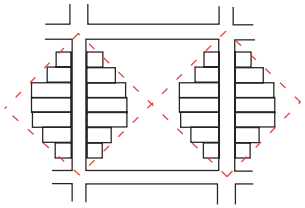
道に面して建物が建つようになる

↓



道に面した側で町が構成される

↓



道を挟んで「両側町」という
町組みが構成される

現代の京都も、通りを挟んだ
向かい側と町内を構成している。

室町時代

平安時代後期以降は道に面して建物が建つようになり、町割りの形状も異なってきます。「両側町」と言われる、町組みとしての共同体の成立です。

室町幕府は三代将軍義満の頃に最盛期を迎え、「花の御所」が創設。この時代、金閣寺や銀閣寺に象徴する、室町文化が花開きます。茶の湯、生け花、能楽・狂言など、現代に通じる日本の伝統文化の始まりです。しかしここで、町が大きく様変わりすることになる出来事、応仁の乱（1467年）が勃発。守護大名の勢力争いは 11 年間続き、戦乱の舞台となった京の都は焦土と化しました。

応仁の乱前後は町の治安が悪化し、集落における自衛の意識が高まりを見せ、町の自治組織が発達します。自衛のためにつくられ始めたのは「構（かまえ）」。集落を取り囲む壁や土居、堀、木戸門、櫓などの構築物のことです。これらは町の連合体である「町組」や「惣長」が構築・維持していたようです。

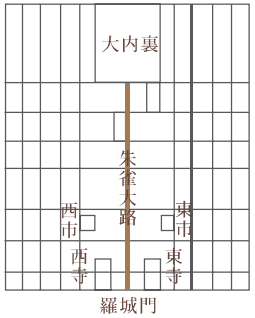
しかしながら戦乱からの復興には目覚ましいものがあり、町は、武家や公家の屋敷が集中する「上京」と商工業者が集中する「下京」という大きな集落に分かれ、復興の機運はこの二つに凝縮し、本格的に近代都市として活気を取り戻していくことになります。戦乱により中断していた祇園祭も町衆の手により復活。町衆の祭として、山鉾は一層豪華な装飾が施され巨大化が進みます。応仁の乱から復興し賑わう京の都は、室町～江戸時代に盛ん描かれた「洛中洛外図」でその様子が伺えます。この後、織田信長・豊臣秀吉により、京の都も中世都市から近世都市へと変貌を遂げていきます。

1397 年
金閣寺建立

1467 年
応仁の乱勃発

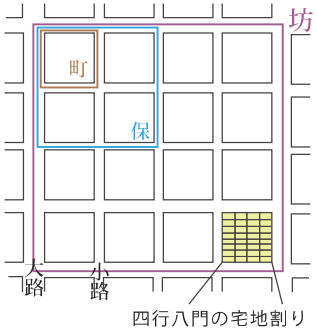
1500 年
応仁の乱で中断して
いた祇園祭が復活

＜平安京＞



朱雀大路の道幅は８５ｍあったとされ、現在の「千本通」がその名残と言われる。

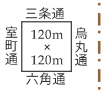
＜条坊制の都市システム＞



一条坊制の街区構成一
朱雀大路を中心に「左京」と「右京」に分けられ、東西の大路によって「条」、南北の大路によって「坊」と分けられた。さらに「坊」は小路によって 16 の街区に分けらる。１坊は４つの「保」に分けられ、１保や４町で構成されていた。つまり、１坊＝４保＝16 町ということになる。

一四行八門の宅地割り一
庶民が暮らした「町」は、１ブロックをさらに細かく縦に４、横に８で区切られ、32 分の１の大きさを一つとした。これを四行八門制という。

40 丈 ×40 丈＝120m×120m が１町とされていたが、この１ブロックの街区の大きさは今もなおそのまま引き継がれている。



平安時代

中国の長安の都を模して造られた平安京。都は羅城門から伸びる朱雀大路を中心に条坊制の都市システムで街区整備されていました。朱雀大路を境に「左京」と「右京」に分けられていました。条坊制の街区の中でも特に庶民の区画は「四行八門制」の宅地割がなされていたようです。

平安京の創建時には、東市と西市という官営の繁華街がありました。この頃、座って物を売るための小屋が現れ、文献の中でも「店屋」（マチヤ）として登場しています。しかし、湿地帯が多かった右京の荒廃とともに、左京に人が集まるようになります。そんな庶民が新しく設けた「町小路」（現在の新町通）がメインストリートになり、道に面して物を売る施設に住居を併設した小屋が立ち並ぶことになります。

京町家の成立には祭事も深く関わっています。平安時代、単に祭りと言えばこの祭りのことを指すぐらいであった「葵祭」。そして平安時代後期には、今の祇園祭の元となる「祇園御霊会」が始まります。平安時代の都の様子が描かれた絵巻物には、町家の原型となる小屋の桟敷（さじき）から、祭事の際に練り歩く行列を町衆が見物している様子が見て取れます。桟敷とは、塀や柵の前（道路と側溝の内側）の築地（壁・囲い）に設けられた仮設物のこと。それまでは築地塀に囲まれた中に小屋がありましたが、次第に、築地を壊して建物を建てる、つまり、道に面して建てるという方法に変わってきます。このあたりから、家が直接道と関わりはじめ、町家の町並みの様相を呈してきたと言えます。

794 年
平安京遷都

798 年
坂上田村麻呂が
清水寺を創建する

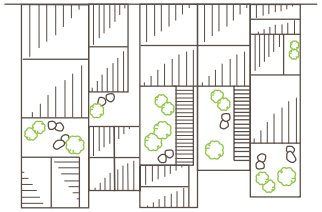
868 年
祇園御霊会はじまる

1011 年
源氏物語完成

1053 年
藤原頼道が
平等院鳳凰堂を建立

1192 年
源頼朝が征夷大将軍に
任命される

<うなぎの寝床>



京町家の特徴の一つに、間口が狭く奥行きが深い地形を「うなぎの寝床」と形容する。近世の頃から都心の人口増加に伴い、宅地を細分化しより多くの住居を作らなければならず、細かい宅地割になった。風説によると、徴税の負担が間口の幅で定められていたため、表に面した間口は狭く、奥に長く建てられるようになったとも言われるが定かではない。

祇園祭

日本三大祭りのひとつ「祇園祭」。その起こりは平安時代まで遡る。疫病が町中に蔓延し、多くの死者が出た。その際、疫病退散を祈り、神泉苑に 66 本の矛（ほこ）を建て、祇園社から神輿を招いて神泉苑に送ったという「祇園御霊会」が始まりと言われる。室町時代に一旦途絶えるが、町衆の力により再興され、今に伝えられる。

葵　祭

葵祭は別名賀茂祭とも言われ、上賀茂神社と下鴨神社の祭礼である。その起こりは古く平安京以前にあるとされる。平安朝の貴族の姿を再現し練り歩く様子は雅で優雅な、京都ならではの祭事である。

江戸時代後期

十八世紀頃の町家は、前述の様々な要因により、外観も統一感のあるもに変化します。一列三室型に、外観は厨子二階、虫籠窓、出格子、といった、今でも京の町中で見かける形が整ってくるのもこの頃です。江戸末期、維新の風潮が強くなり、1864 年に起こる蛤御門の変で町は戦火に巻き込まれ、「どんどん焼け」と言われる大火で洛中は大部分を消失することとなります。現存する古い町家はこれ以降に建てられたものとみられ、多くは明治から大正にかけて再建されたものと言われています。

1788 年
天明の大火

1864 年
池田屋事件
蛤御門の変

明治～大正時代

幕末の混乱で京都の町は焼け野原となり、さらに明治維新により国の中枢が東京に遷都したため、都としての機能を失い衰退の暗雲が立ち込めていました。しかし新たな近代産業都市として復活をかけ、内国勧業博覧会が誘致され、町は目覚ましく発展を遂げます。文明開化は建築の分野においても大きな影響を及ぼし、明治も末期になると木造の町家においても総二階の家が建てられるようになります。ガスや電気も整備されて生活様式が劇的に変化するとともに、伝統的な町家の建築手法にも変化が出てきます。大正期に入ると、西洋の文化が庶民の間でも広がり、町家の中にテーブルで椅子に腰かける応接間がある和洋折衷のもが現れます。建材や工法技術の急速な発展により、一層近代的な特性を備えた住宅へと変化していきます。

1890 年
琵琶湖疏水完成

1895 年
平安遷都千百年記念祭
第４回内国勧業博覧会

昭和から現在へ

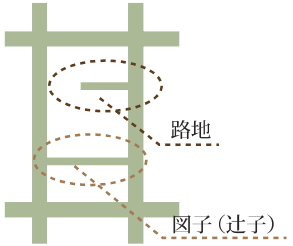
「町家」が建てられたのは、昭和２５年の建築基準法が制定されるまで。これまで主流であった「伝統工法」による建築が困難になり、新しい「在来工法」が主流となって今日に至ります。幸いなことに、太平洋戦争による被害が比較的少なかったため、古くからの町並みが残ることになりました。

現在、市内中心部に残る町家の数は、平成２２年度京都市の調査によると４７，０００軒と言われています。しかし、その５％は空家であったり、老朽化しているとの調査データが出ています。建物の老朽化や、維持管理の難しさ、住人の不在などから手放す所有者が多く、今も尚、マンション用地やガレージへと姿を変えています。

1945 年
太平洋戦争終戦

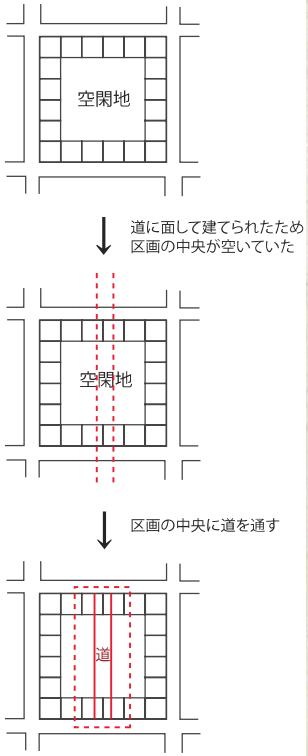
1950 年
建築基準法制定

<路地・図子の発生>



通りと通りの間に通された小道は総称して「路地」と呼ばれ、中でも突き抜けず袋小路になっているものを「路地」、向こう側の通りまで突き抜けているものを「図子」と呼び分ける場合もある。

<突抜町の発生>



新たに通した道の両側にも
建物が並び、新たな町を形成する

安土桃山時代

特に秀吉の都市改造は後の京都に大きな影響を与えます。栄華の象徴である聚楽第の造営に着手する一方、平安以来続いていた町割りから、無駄な空き地を宅地に変える短冊型の町割りへと転換。区画の奥に残った空間地の有効利用として、小道を通し、さらに細かな区画割りを行います。それがその後の京都の町を形成する「路地」や「図子」を生み出すことになります。そして、大きな街区の中央に道を通してできたのが「突抜町」。今も”了頓図子町”や”天使突抜町”といった町名がその名残りを表しています。現在の「富小路通」は、この改革の際に作られた通りであると言われています。

そして聚楽第を中心に武家や公家、商工業者をを配置し、寺院や商工業者などを集住させ武士が支配する城下町へと改造が進みます。さらには、外敵からの防御壁として都の廻りを取り囲む「御土居」と呼ばれる城壁もつくられ、御土居の内側を「洛中」、外側を「洛外」と定めました。「京の七口」はこの御土居の往来に定めた「口」と呼ばれる関所のことです。現在の京都の町は、平安京をベースに秀吉が改造を加え近代都市に発展してきたと言えます。

1581 年
本能寺の変

1590 年
豊臣秀吉関白へ

江戸時代初期～中期

安土・桃山時代の頃は、卯建のように様々な意匠で飾られた町家を洛中洛外図に見ることができます。しかし、徳川幕府による支配体制に入ってからは、京の町家も徐々に洗練され統一感のある町並みに変わっていきます。特に江戸時代中期に入ってから２階建てを始め、華美な家作（装飾）が禁じられるようになります。さらには、町を焼き尽くす大火事が重なり、火事後の復興に大量の住宅建設が急務となりました。このときに、建材の需要と建築技術の発展、住宅の規格化・標準化が飛躍的に進み、町並みはより一層統一されたものになっていきます。防災の観点からは桟瓦（さんがわら）が発明され、それまで板葺きであった庶民の住宅も屋根瓦が普及し、益々町並みの調和をもたらすことになりました。

1600 年
関ヶ原の戦い

1662 年
大文字の送り火
始まる

1708 年
宝永の大火

町家の外観

一口に京町家と言えどもその形は多様。歴史の流れに翻弄されながらも時代ごとの合理性と美意識が垣間見える。年月を経て今に伝わる姿をご紹介。

厨子二階

「つしにかい」と読み、又は「中二階」とも呼ばれる。江戸～明治にかけて建てられた様式で、２階の天井が低く、おもに物置として使用されていた。

総二階

明治末期から大正にかけて建てられた様式。「本二階」とも呼ばれ、２階の階高を高くし、居住用として使われるようになる。外観の虫籠窓がガラスの窓に変化する様子が見受けられる。

仕舞屋

「しもたや」と読む。表に店の間を持たず、店を「仕舞った」ことにちなんでこのように呼ばれる。明治後期から大正にかけて登場するが、京都では数が少ない。出格子が小さいことが多い。

昭和初期型

総二階の外観に、１階部分は出格子ではなく、腰壁が設けられ、すりガラス窓や真鍮やアルミなど金属性パイプの格子が取り付けられた。

大塀造

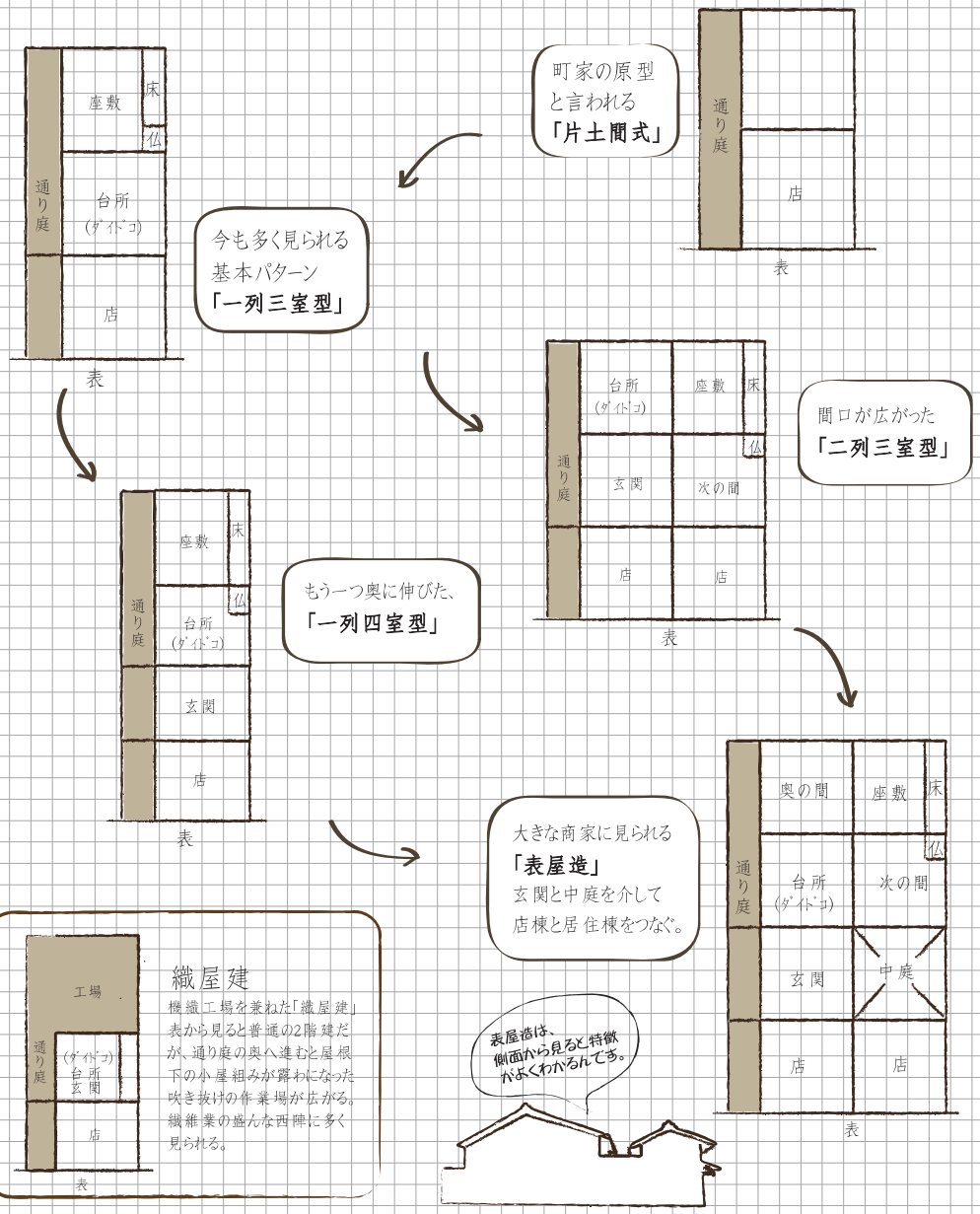
「だいべいづくり」と読む。裕福な商人や医者などが住宅専用に建てた塀付きの町家。道に面して塀を立たせ、前庭の奥に建物が建つ。建物が道路に面していないことが特徴。

看板建築

町家の外観だけを近代的なビルのように階層したタイプ。内部はそのままで、タイルやレンガ、モルタルなどを用いて外観のみ改修されているので、元に戻すことは比較的容易である。

間取の変遷

暮らしの基盤となる家の間取りも時代とともに少しづつ進化してきた。商いと住まいの使い分けがなされたこと、間口が狭く奥に伸びていくことなど、間取を見ると人々の暮らしが変化していく過程を垣間見ることができる。



織屋建

機織工場を兼ねた「織屋建」表から見ると普通の2階建だが、通り庭の奥へ進むと屋根下の小屋組みが露わになった吹き抜けの作業場が広がる。繊維業の盛んな西陣に多く見られる。

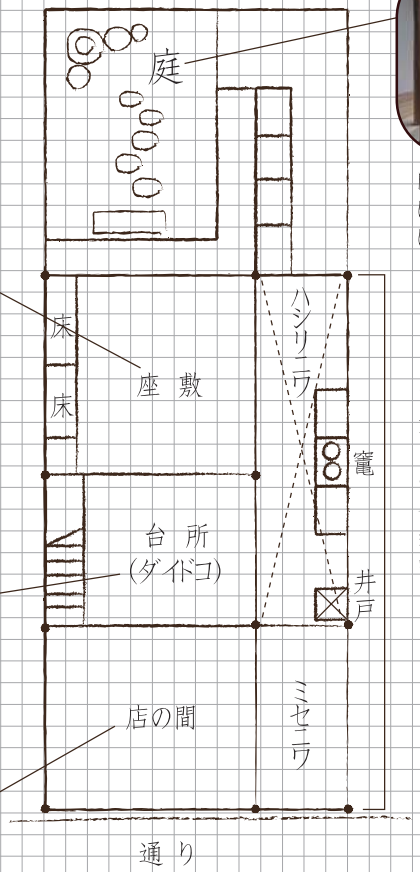
間取の構成

職住がともにある町家は、「店」と「住居」が区別された機能的な建物であり、玄関から奥に行くほどプライベートな意味合いが強くなる。通り庭の連続する土間で緩やかな繋がりを持ちつつも、暖簾や中戸で公私の境界を表す。ここで言う「台所（ダイドコ）」は、現代の「居間兼食堂」にあたるスペースである。

主人が客人を招く座敷であったり、時には夫婦の寝室にも。祭事の際は襖が外され開放される。

家族が食事をするスペース。つまり現在の「居間兼食堂」にあたる。

商いの部屋。店舗や商談の場になる公的意味合いが強い。ハレの日には格子を外して祭事の舞台となる。



間口が狭く奥に長い町家には、光や風を通すために庭は欠かせない存在。

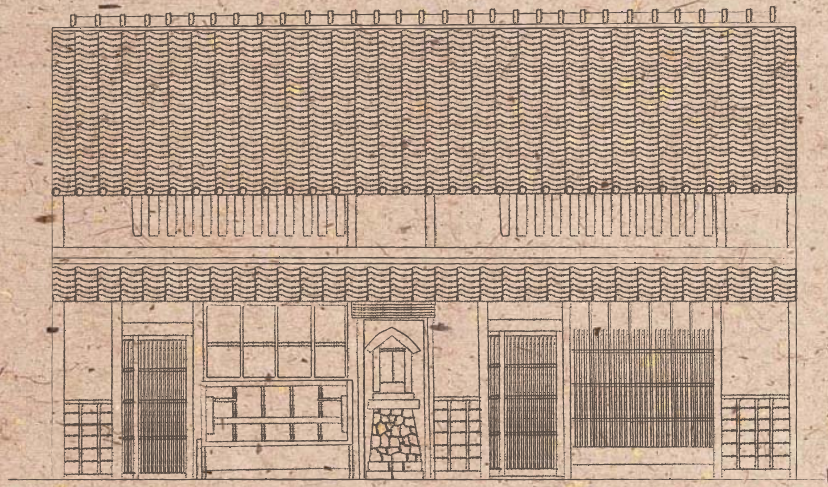
通り庭

玄関から奥まで連続して続く土間。おくどさんや井戸のある「ハシリニワ」はプライベート空間であり、公的空間である「ミセニワ」とは中戸や暖簾で区別される。

「ハシリニワ」の上部は屋根まで吹き抜けのになっている「火袋」が広がる。

京町家の意匠

町家の意匠は先人の智恵や美意識の結晶
それぞれに奥深い意味が隠されています



鍾馗さん

京の町家は日常的に二種類の神様に見守られています。まず外には、軒上で見守る鍾馗（しょうき）。日本では五月人形の一種としても扱われますが、元々は中国の故事に由来する魔よけの神様。中国は唐の時代、玄宗皇帝の夢枕に出てきたことが始まり。玄宗皇帝が高熱で苦しんでいたところ、小鬼が宮廷内でいたずらをしまわっている夢をみたという。するとどこからともなく大男が現れて、あっという間にその小鬼を食べてしまった。玄宗皇帝が大男に正体を尋ねると、『私は終南山の鍾馗と申します。科挙の試験に失敗しそのことを恥じて宮中で自殺をしましたが、帝が手厚く葬ってくれたので、その恩に報いるためにやってきました。』 玄宗皇帝は夢から覚めると、病気が治っていることに気がつきました。そこで、絵師に命じて夢でみたままの鍾馗の姿を描かせ、その鍾馗の絵姿を邪気を祓う守り神としたそうです。たっぷりとした髭を蓄え、右手に剣を持っていますが、ぽっこりしたお腹の立ち居姿は様々に表現され、どことなく愛嬌が感じられます。京都の人々は「鍾馗さん」と親しみを込めて呼んでいます。

愛宕さんの御符

外に対して家の中では、火伏せ（火除け）の神様。江戸時代に三度の大火に見舞われましたが、京都は江戸に比べ火事が少なかったと言われ、それだけ防火に対する意識が強かったようです。特に、生活の中心となる炊事場は神聖な空間とされ、火伏せの神様が祀られます。一つは、愛宕山（あたごやま）山頂にある愛宕神社の「火迺要慎（ひのようじん）」の御符。昔であれば、おくどさん近くの壁に貼られたり、現代でも台所や店の厨房などにも貼られています。愛宕山は京都の人なら一度は登ると言われるほど身近なもので、京都の人は親しみをこめて「愛宕さん」と呼んでいます。

布袋さん

そしてもう一つの火除けの神様は「布袋さん」。一般的には七福神の一人として知られていますが、京の町家においては「火伏せ」の神様。「火迺要慎」の御符と共に、おくどさん付近の壁に、三宝荒神が祀られ、その使いとして布袋さんが並べられます。新年を迎える毎に、小さいものから順に買い求め一体ずつ並べていきます。何事もなく7年が過ぎれば、全て返納し、またはじめから並べていく風習があります。途中で不幸があったら、川に流して、またいちから並べていくそう。そんな布袋さんは土人形であり、古来より人形作りが盛んであった伏見の地でその多くは作られていたようです。

格子・出格子

応仁の乱の後、自衛の為に設けられるようになったと言われる。その形状は職業によって異なり、室内に光を取り込みたい織物業などに多いのは「糸屋格子」。米俵がぶつかってもいいよう頑丈に作られた「酒屋格子」、「炭屋格子」、店を仕舞ったことに由来する「仕舞屋格子」などがある。

糸屋格子

切子格子

仕舞屋格子（しもたや）

酒屋格子

揚げみせ（バッタリ床几）

通称バッタリ床几と呼ばれる。その発生は古く、応仁の乱以降にはあったと言われる。本来の用途は商品を陳列して物を売る棚としての役割を持っていた。店をやめることにより機能が薄れていくと、昭和の初めごろには、夕方になると夕涼みするような談笑の場になっていった。現在市内ではあまり見られなくなっている。

虫籠窓

虫籠のような形をしていることから「むしこまど」と呼ばれる。漆喰で塗り込められた窓のことで厨子二階に多く見られる。火災が多かった江戸時代に防火対策として用いられ広まった。一説によると、庶民が武士を見下ろさないよう低くしたとも言われるが定かではない。

瓦

一文字瓦

饅頭瓦

京の町家の軒先を見ると二通りの形に分けられる。軒の端が波状に連なる「一文字瓦」。そして、取りあいの部分に丸い瓦が取り付けられる「饅頭瓦」。特に「一文字瓦」は瓦の端を切り落としたような形が連なり、連続して並ぶその様子は町並みに統一感をもたらし端正な印象にする。一文字瓦の厚みは家の裕福さも表し、大きな商家などでは分厚くどっしりとした瓦が使われている。そんな連続する軒下のスペースは、通りとともに半公共のスペースでもあったそう。

通り庭

玄関から奥まで連続する土間空間のこと。おくどさんや井戸のある「ハシリニワ」は現在の台所にあたる私的空間であり、商売が行われる公的空間である「ミセニワ」とは中戸や暖簾で区別される。この「ハシリニワ」の上部に火袋が広がる。炊事場付近の壁には、火伏せの神様として「火迺要慎」と書かれたお札を貼ったり、布袋さんを並べる風習がある。

おくどさん

炊事場は神聖な場所とされ、特に竈（かまど）について京都の人は親しみをこめて「おくどさん」と呼ぶ。時期により、炊き口が複数あるものや、漆喰やレンガで造られるなど種類や規模は様々である。大阪では「へっつい」と呼ばれる。

火　袋

ハシリ庭の上部に広がる吹き抜けの空間のことで、「ひぶくろ」と呼ばれる。炊事の熱気や煙を逃がす空間であり、火事の際に周囲への延焼を防ぐため火を閉じ込める役割も持つ。行き交う梁の造形は、大工の腕の見せ所であり、「準棟纂冪（じゅんとうさんぺき）」と称される。

庭

町家において庭は欠かせない存在。奥に細長い町家は光と風が通りにくい。薄暗い部屋の中から庭先を見ると、ぱっと明るく、光と影のコントラストが何とも言えない美しさを醸し出す。そして、酷暑と言われる京都の夏、庭にたっぷりの水を打てば涼風を呼び起こし、家の中を心地よい風が通り抜ける。隣家と壁を接する住宅密集地の中で、光や風の通り道を確保しながら、暮らしに自然を取り込む工夫。見た目の美しさだけでなく、夏の蒸し暑さをもしのぐ先人の智恵がここにも垣間見られる。

犬矢来

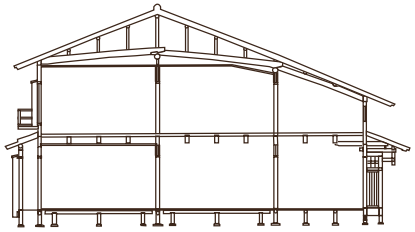
敷地と道路の境界の役割を持ち、泥はねや埃から建物を守る。竹で作られることが多く、丸みを帯びた姿が美しい。中には金属性のものも見られ、その形状は家々の個性が出る。

駒寄せ

「こまよせ」と呼ぶ。犬矢来と同じく、道と敷地の境界線の役割を持っている。一説によると、牛馬をつなぎ止めていたとも言われるが定かではない。

階段

うなぎの寝床と称される町家において、階段は隅に追いやられる存在。急勾配であり幅も踏み板も狭く、省スペースに作られる。時には押入れに隠されて収納と兼用されることも。左写真は「箱階段」。階段箪笥とも呼ばれ、可動式のものや壁と一体になったものがある。



建築基準法と京町家の構法

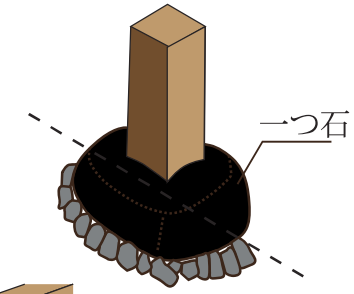
京町家が現代の建物と異なる最大の点、それは「伝統構法」で建てられていること。戦後の復興にともない、建物を建築する上での法律として、昭和二十五年に「建築基準法」が制定されました。「建築基準法」とは、建築物の敷地、構造、設備及び用途に関する最低限の基準を定めたもので、戦後の社会情勢の大きな変革の中で制定されました。飛躍的な技術革新と新法の後押しにより住宅が大量生産される時代がやってきます。

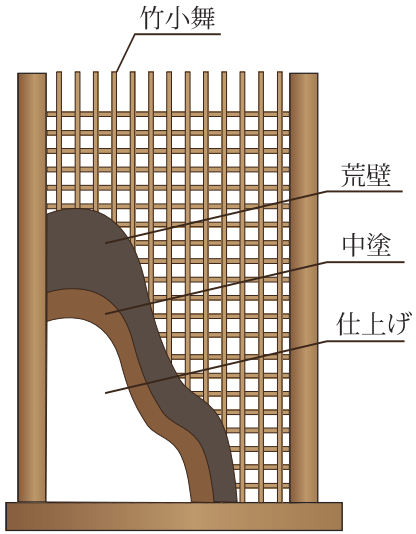
しかしながらそれまで主流であった伝統構法は、新しい建築基準法にそぐわない点が多く、従来の伝統構法による新築が不可能となり、技術革新によって新たに生まれた「在来工法」が表舞台に登場し現在に至ります。

そのため、新法が制定される以前に建てられた「伝統構法」の京町家は現行の法律に合致しない「既存不適格」という立場を強いられることになりました。従い、一度壊してしまうと、再び昔ながらの構法で新築することは叶いません。しかし、改修することにより使い続けることは可能です。ただ、先人が智恵を凝らし手間暇をかけた伝統の技術を再現することは難しく、専門的な知識と技術を要します。伝統構法は、筋交いや金物に頼らない、柱や梁などの木組みにより耐力を生み出すもの。京町家を将来に渡り残していくことを思うと、伝統構法に適した改修技術を培わなければなりません。

基礎

伝統構法で建てられている京町家は、いわゆる「基礎」が無いことが最大の特徴。「一つ石」や「葛石」という基礎となる石の上に構造部が置かれているだけで、緊結していない。「葛石」は外観の足元で見ることができる。



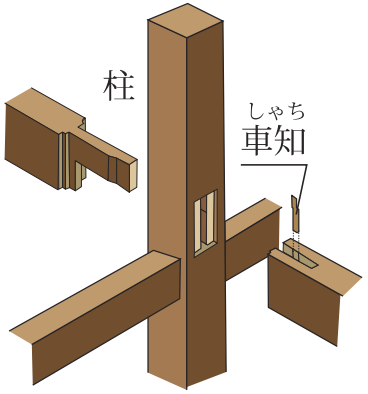


壁

竹小舞壁の下地に土を塗り込み、仕上げには聚楽や漆喰など自然の素材を用いる。化学製品を用いない土は、吸湿効果が高く、気候に応じて湿気を出し入れする。

継手・仕口

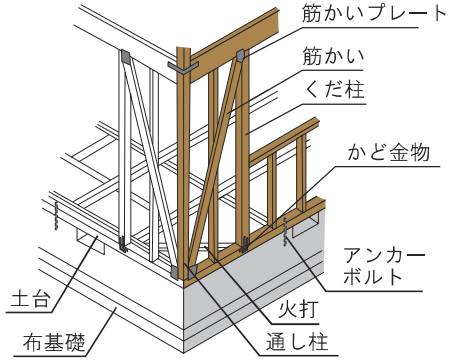
接続部に金物を使わず、柱や梁など二つの部材をつなぎとめる方法。木と木をがっちり組んで、クサビや車知（しゃち）、こみ栓などでとめられます。接合部分の形状と継ぎ方は様々で、施工部分に適した方法が用いられます。

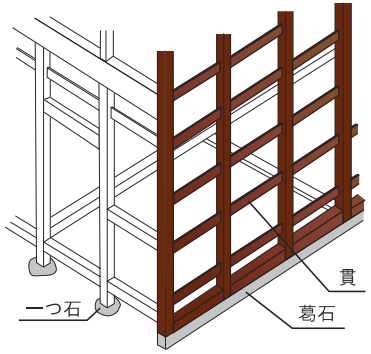


在来工法

土台がコンクリート製の基礎に緊結

従来からある工法を母体としながら、建築基準法などの制定や技術革新により新たに生まれた工法の総称。





伝統構法

土台が基礎石と緊結していない

建築基準法制定以前からあり、筋かいや金物に頼らず、柱や梁などの木組みにより耐力を生み出す工法。

路地と石畳

碁盤の目のような街区が特徴の京都の町。

♪丸竹夷二押御池～姉三六角蛸錦～♪

♪寺御幸麩屋富柳堺～高間東車屋町～♪

と歌われるように、東西南北に走る道には通り名がついている。現在の京都は、平安京から続く街区の中で、秀吉の時代に、建物の背後にできた空閑地の有効利用が考えられ、まるで毛細血管のように至るところに小道が通された。つまり、表通りに面した大店の奥の空いたスペースを利用し長屋が建てられ借家とするようになる。その小道を路地や図子と呼んでいるのだ。そして今日の京都は、幸いにして太平洋戦争の被害が少なかったため、町は昔のままの姿を保ち、これらの小道も町家も今日まで残ることになったと言うわけだ。この路地とともに時々見かける石畳。京都のしっとり、はんなりしたイメージの代表格だが、本来は住む人にとっては欠かせない生活路。そんなわけで、路地や石畳は京都になくてはならない風景なのである。

路地

石畳

路地の町家の多くは戦前に建てられているため、戦後に制定された建築基準法の条件を満たしていないとして、建て替えができないことが多い。そのため、金融機関による担保評価が厳しく、融資をうけて購入するということが困難、つまり買い替えがしにくいという難点があるのだ。徐々に住み手がいなくなり空家のまま老朽化した町家が増えていることは問題にもなっている。しかし近年は、このような路地奥の町家の再生利用が盛んに取り組まれ、次々と店舗や宿泊施設に姿を変えている。

この路地が京都を象徴する風景であることに間違いはない。この路地の風景がなければ町家が連なる町並みの魅力は半減すると言っても過言ではない。雨で濡れた憂いある石畳は、路地で遊ぶ子供たちは、日本の古き良き時代の原風景でもあるだろう。この先も「ロージ」のある風景が京都の象徴であることを願ってやまない。

京町家検定

京町家に関する歴史・意匠・建築・生活の4分野から知識を問う検定試験。平成十八年よりWEBで開始。

【開催要項】

開催期間　年2回（初級編・上級編）

出題数　50問中70％正解で合格

合格認定　合格認定書発行

鍾馗さんストラップ進呈

（※上級編合格者のみ）

主　催　株式会社　八清

京町家の本　其ノ壱

作製・編集　株式会社八清

監修　一級建築士　松井薫氏

京都市下京区東洞院通高辻上ル高橋町六一九

電話（〇七五）三四一ノ六三二一

http://www.hachise.jp